

氏 名	中 西 電 也
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 432 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	17・18世紀における中国ムスリムのイスラームについて

論文調査委員 (主査) 教 授 濱 田 正 美 准教授 中 砂 明 徳 准教授 東 長 靖

論 文 内 容 の 要 旨

本稿の目的は、17・18世紀、すなわち明末から清の半ば頃までにおける中国ムスリム（中国内地もしくは沿岸部に居住して漢語を日常語としたムスリム）のイスラームをめぐる、その思想・学術や信仰実践の実態を解明し、「中国化したイスラーム」の特殊性を検証することである。

本稿が対象とする17・18世紀は、中国ムスリムにとっては、イスラームに関する学術の興隆と再イスラーム化の時期に当たる。明中葉を過ぎた16世紀後半、彼らの間では、「土着化」の進展に伴ってイスラームの何たるかがほとんど忘れ去られ、信仰が消滅の危機に瀕していたが、胡登洲（1597年没）によるいわゆる「経堂教育」の提唱を皮切りに、イスラーム教学が勃興し、再イスラーム化が徐々に進んでいったのである。17・18世紀には、彼らの間から、アラブ・ペルシア語經典に通じる多くのムスリム学者が輩出されるようになり、その中からはさらに、いわゆる「漢文イスラーム文献」を著す者も現れるようになった。中国ムスリムのイスラームの基本的性格が形づくられたのは、まさにこの頃であった。かくして輪郭の定まった中国ムスリムのイスラームをめぐるのは、従来、その性格は存在一性論やスーフィズム、ハナフィー派法学、ペルシア語文化といった要素によって基礎付けられていたと指摘されてきた。が、その一方で、それは「中国化」した特殊なイスラームであったとも目され、イスラームの「中国化」という現象の存在が、しばしば論断されてきた。

しかしながら、従来の研究がその証拠として提出してきたのは、ほとんどの場合、漢文イスラーム文献の漢文の文字面上に中国伝統思想の術語や言い回しが見られるということに過ぎなかった。漢文イスラーム文献が基本的にはアラブ・ペルシア語文献の「翻訳」であった以上、その著者たちがそれらの術語や言い回しによって表現しようとしたところは、イスラーム思想そのものであったかもしれないのだから、結局のところ先行研究は、イスラームの「中国化」、乃至はその産物たる「中国化したイスラーム」の実態について、何ほども明らかにしてはこなかったのである。

そこで本稿では、17・18世紀における中国ムスリムのイスラームを基礎付けたものとして定評のある、存在一性論、スーフィズム、ハナフィー派法学、ペルシア語文化に的を絞り、彼らによる受容の実相を探ることから、イスラームの「中国化」の実態解明を試みた。

第一章では、漢文イスラーム文献の一つである劉智の『天方性理』と、その主要な原典である‘Abd al-Raḥmān Jāmī の *Lawā’ih* 及び *Ashī‘a al-Lama‘āt* とを原文比較することにより、前者において後者の説く存在一性論が如何様に「翻訳」されていたかを検討した。その結果、原典で形而上に措定されていた「恒常的諸實在 (a’yān thābita)」と「靈的实体 (malakūt)」の二段階が、『天方性理』では、諸「理」の一段階（諸々の「理」が分化する段階）に圧縮される形で「翻訳」されていたことが判明した。また、原典において「恒常的諸實在」と「靈的实体」それぞれの前段階に措定された「ムハンマド的真實在 (Ḥaqīqat-i muḥammadi)」と「至高の筆 (qalam-i a‘lā)」が、『天方性理』では、諸「理」が分化する前段階の、渾然たる一理に統合されていることも分かった。つまり、劉智が描く形而上の構造（絶対一者→一理→諸「理」）は、Jāmī の説くところ（絶対一者→「ムハンマド的真實在」→「恒常的諸實在」→「至高の筆」→「靈的实体」）よりもむしろ

ろ、儒教理学の存在論の構造（絶対一者たる一理→諸理）に近づいていたのである。しかしその一方で、劉智が渾然たる一「理」の段階に位置づけている「義理」は、機能の上から見れば、「霊の実体」の形而上にある「恒常的諸實在」に相当するものであった。劉智は、「義理」を渾然たる一「理」の段階に含めることで、あくまで一理→諸理という構造に固守したが、彼が「恒常的諸實在」と「霊の実体」を別次元のものと認識していたことは、明らかであった。そして以上より、劉智の「翻訳」には、イスラームと中国の正統思想たる儒教との同一性を証明するための意図的な操作が認められ、それは、17・18世紀の中国ムスリムたちが、圧倒多数の異教徒に囲まれながら自らの信仰を維持していくために採った戦略の一環に位置づけることができる、と結論づけた。

第二章では、スーフィー教団が浸透せず、スーフィズム実践の教導が可能なシャイフを欠いていた中国内地もしくは沿岸部のムスリムたちが、本来シャイフ無しには成立せぬスーフィズムをどのように受容していたかを検討した。まず、神との合一を目指すスーフィーが修行を通じて進級してゆくべき神秘階梯（maqāmāt）をめぐる、余浩洲の『眞功發微』に説かれるところが、Najm al-Dīn Dāya Rāzī の *Mirṣād al-'Ibād* を典拠とすることを示した上で、双方の神秘階梯に関する記述を比較した。その結果、原典では、知識の獲得への過剰な努力が戒められ、それが否定的に語られているのに対して、『眞功發微』では、実践的修行にはほとんど言及がなく、むしろ知識の獲得が奨励され、それが修行の要に置かれているという差異を発見した。加えて、同様にスーフィーの完成に向けて実践よりも知識を重視するという傾向は、馬注の『清真指南』にも見られた。そして、以上より、17・18世紀の中国ムスリムは、実践よりもブッキッシュな知に比重を置いた形でスーフィズムを受容していたのであり、それは、彼らの身近にいた胡登洲の学統に連なるアホンたちが導師の役割を果たせるようにするためであった、と論じた。また、『經學系傳譜』や「建修胡太師祖佳城記」の記述に拠って、胡登洲の学統の正統性が如何にして確保されていたかを検討した。そして、ムハンマドとの道統関係が不明であるため、本来ならばシャイフの資格を有すはずのない胡登洲が、中国ムスリムの間では、神に選ばれた完全人間にしてムハンマドの道統を継ぐべきシャイフと見なされ、その権威によって彼の学統に連なるアホンたちの学問の正統性は確保されていた、ということを明らかにした。加えて最後に、中国ムスリムが、知識に比重を置いた形でスーフィズムを受容し、且つ胡登洲の学統を通じて「正統な」学問を継承しているとの自負を持っていたことが、中国内地もしくは沿岸部におけるスーフィー教団の浸透を妨げる一因となった、と論じた。

第三章では、「納家營清真寺アラブ語碑文」の解説を通じて、中国ムスリムの法学派観を問うた。まず、当該碑文の実見に基づくアラブ語テキストとその日本語訳を掲げた。次に、問題の碑文が、いわゆる「新行」と「古行」の何れが是か非かをめぐる教義論争を背景に、前者を擁護し後者を排撃しようとする人々によって、18世紀初頭に立てられたものであることを明らかにした。そして、同碑文においては、スンナ派正統四大法学派の存在に触れる一方で、新行がハナフィー派学説に、古行がシャーフイー派学説に同定されていることを根拠に、その碑文の立碑関係者は、スンナ派四大法学派が何れも正統であると知りながら、実際にはそのうちのハナフィー派のみを正統として信奉し、ハナフィー派以外の学派に従うことを是としていなかった、と論じた。加えて、張中の『四篇要道』や、「反対新行教碑文」にも、同様の態度が見られることを指摘した。そして中国ムスリムのそのような法学派観は、中国の辺縁性に由来する經典の欠如によって助長されたものであり、「中国的イスラーム」の特殊性のうちに数え得ると結論づけた。

第四章では、中国ムスリムの間に、ペルシア語文化の影響が濃厚であったにもかかわらず、ペルシア語文化圏中核地域とは異なり、ペルシア語が書写語としての地位を獲得できなかったことの背景について考察した。まず、中国ムスリムのペルシア文学に関する教養を示す事例や、彼らの漢語著作における「ペルシア語的漢語」（ペルシア語の影響下に新たな意味を獲得した漢語）の使用例から、中国ムスリムに対するペルシア語文化の影響の強さを確認した。次に、17・18世紀の中国ムスリムの間でペルシア語による著述がほとんど行われなかったことの背景として、第一に、漢語やアラブ語の読者層に対する、ペルシア語読者層の相対的貧弱さを指摘した。そして第二に、17・18世紀中国ムスリムの間で進行した再イスラーム化に伴ってアラブ語の威信が増大したことにより、ペルシア語による著述の場が奪われていった経緯を説明した。

論文審査の結果の要旨

漢語話者である中国のムスリムたちが育んできたイスラーム思想の問題は、大方のイスラーム学者から等閑に付され続け

てきたが、ここ十年ほどの間に状況は劇的に変化し、多くの研究者が関心を寄せる人気の研究分野になりつつある。現時点で研究者たちは概ね、「異教徒」の政治的支配を受け、漢語話者となったムスリムのイスラームは果たして特殊であったか、という問題意識を共有しているように見受けられるが、本論文の著者も亦この問題意識に立脚して、存在一性論の受容、中国ムスリムのスーフィズム、ハナフィー法学派への帰属、ペルシア語文化の受容という四つの論点を設定した。この四つが、中国のイスラームを構成する重要な要素であることに議論の余地はなく、論者の問題設定は極めて妥当である。

第一章では、Ibn 'Arabi 流のいわゆる存在一性論 (waḥdat al-wujūd) が劉智の『天方性理』において如何に受容されているかが論じられる。論者は先ず、劉智自身が典拠として挙げている 'Abd al-Raḥmān Jāmī の著作 *Lawā'ih* 及び *Ashī 'a al-Lama 'āt* にみえる存在顕現の過程に関する言説の整序的な理解を試みたのち、これを『天方性理』と比較対照することにより、劉智は、この過程を「絶対的無限定」から「万物の出現」に至る六段階に分節する Jāmī の基本構造に忠実ではあるものの、Jāmī によっては別の段階に位置づけられたものを、相互に浸透させたり、重ね合わせたりしている個所が複数あることを指摘した。就中、神の知識の内に顕現する恒常的諸実在 (a'yān-i thābita) とその外面への顕れである霊体 (malakūt) の双方がともに「理」の一語を以て訳された結果、本来の二重構造が「一理」の構造に圧縮され、儒教の存在論により近づけられたとの指摘は、イスラーム思想の中国化を考える上で極めて重要な貢献である。ただし、ここに至るまでの精緻な議論と比較して、そこから導かれる、この圧縮は中国ムスリムが中国社会において信仰を維持していくために意図的に採用した戦略の一環であったという結語は聊か唐突の感を免れ得ず、再検討を要する。

第二章では、中国ムスリムのスーフィズムの特殊性が論議される。彼ら中国ムスリムが「経」と称して尊重し祖述を繰り返した文献の多くは、ペルシア語スーフィズム文献であり、スーフィズムの教義が広く知られていた事実が認められている。しかしながらスーフィズムの不可欠の要素である、称名 (dhikr) 旋舞 (samā') 瞑想 (tawajjuh) などの身体技法に基づく修行が実践された形跡は皆無である。論者は、中国ムスリムがひたすらスーフィズム文献の読解にいそしんでいた実情を明らかにし、明末以来発展した「経堂」における知識の授受は、学統を重視する強固な観念を形成したものの、それは本来のスーフィズムの預言者に発する秘教的叡智の継受による道統 (silsila) とは、似て非なるものであることを示した。その学統の正統性への確信が、道統の基盤の上に成立するスーフィー教団の発展を阻害した要因の一つであるとの指摘は傾聴に値する。

第三章において論者は、ハナフィー法学派に帰属する中国ムスリムの、その帰属の意識のあり方を取り上げる。雲南省通海県納古鎮納家營の清真寺に現存するアラブ語碑文のテキストとその翻訳を、現地調査で得た知見に基づいて先行研究を訂正しつつ提示し、ついで碑文の作成年代を康熙・雍正の交に比定出来るとの考証を行ったのち、論者は、この碑文が、礼拝の際の礼式を巡って争っていた新行・古行両派のうち、前者の主張する礼式を Abū Ḥanīfa のもの、後者のそれを Imām Shāfi'ī のものとし、絶対的に前者に従うべきことを主張していることに注目する。中国ムスリムは、四法学派の存在を知ってはいたが、ハナフィー派以外の学派の説については具体的に知るところがなく、分派の争いに際しては、互いに自らこそがハナフィーであると主張し、相手をシャーフィイーであると指弾していたという事実の発掘により、論者は中国ムスリムにとりハナフィー派への帰属はほとんどムスリムであることと同義であることを明らかにした。

第四章では、漢語以外に時としてアラブ語を用いて著述を行った中国ムスリムが、絶えてペルシア語を書写語としなかった問題が扱われる。論者は、宗教文献ではないペルシア文学が知られていた形跡や、漢語イスラーム文献にペルシア語の calque とおぼしい漢語表現が存在するという興味深い事実を指摘しつつ、一方では清代のムスリムの間において、聖なる言語であるアラブ語の威信と漢語の伝達能力の間にペルシア語が埋没してしまった事情を明らかにした。ここでの議論自体には間然するところはないが、しかしペルシア語文献とその漢語による祖述の問題を扱った第一、第二章とこの章の結論はいかに結びつけられるのか、疑問なしとしない。そもそも中国ムスリムにとっての漢語の問題が論議されるべきであるが、それは今後の課題である。

既に述べたような若干の問題はあるものの、本論文はアラブ語、ペルシア語、漢語の文献を等しく扱う優れた言語的能力とイスラーム学に関する豊かな知識を総合して成ったものであり、中国イスラーム思想研究の現在における到達点を示す優れた業績であると評価できる。

以上、審査したところにより本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年2月20日、

調査委員 3 名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。